

社会階層とソーシャル・サポートの関連についての分析 -多母集団解析簡便法の適用-

菅野 剛
(大阪大学大学院)

The Relationship between Social Stratification and Social Support Tsuyoshi Sugano

本研究は、社会階層とソーシャル・サポートの関連について分析をする。社会階層の変数として、学歴と世帯収入で表される社会経済的地位と、専門・管理職、事務・販売職、労務・農業、無職の四つの職業分類を扱う。ソーシャル・サポートとしては、相談、経済、病気、介護についての四つの個別サポート項目をもとに全体的なソーシャル・サポートを測定する。

分析には、職業ごとのソーシャル・サポートの平均構造の違いを考慮できる、多母集団解析簡便法を用いた。男女それぞれに対して分析をした結果、社会経済的地位とソーシャル・サポートは正の関連を示した。また、ソーシャル・サポートの潜在変数の平均を見ると、男性では、専門・管理職が最も高い値を示し、事務・販売職、労務・農業、無職の順に値が低くなる。女性でも専門・管理職が最も高い値を示した。ソーシャル・サポートの享受は、パーソナリティ等の個人的問題というミクロな側面もあるが、社会的資源の不平等な分配状況を表す社会階層と関連するマクロな側面が重要である。

キーワード：社会階層、ソーシャル・サポート、構造方程式モデリング

1. 人を支えるソーシャル・サポート

(1) 社会構造とソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートについては従来から様々な視点から研究がなされてきた。例えば、ソーシャル・サポート研究はストレス研究と密接な関連を持っており、ソーシャル・サポートがストレスを減らすのかどうかについて直接効果や交互作用効果でストレス緩衝効果について分析がなされてきた(稲葉・浦・南 1987)。また、ソーシャル・サポートに対してパーソナリティの効果や援助行動がどのような条件で生じるのかということ等、心理的・社会心理的なアプローチが多くなされてきた(浦 1992)。一般に、周りの人々からの協力的な

ソーシャル・サポートを受けられるかどうかはプライベートな、個人的な問題とみなされることがある。つまり、一人一人の日常生活における、人間関係の維持の問題であると考えられることが多い。しかし、ソーシャル・サポートの潜在的動員可能性は、単に個人差の問題だけに還元できるものではなく、社会的資源の不平等な配分状況の影響も受けていると考えることもできる。

社会構造を考慮する社会学においては、高齢者のソーシャル・サポートの性別による違い(野辺 1999)や、ジェンダーや社会階層の視点からの研究(大和 1996, 2000)等がなされてきた。本研究では、特に社会階層的な視点を重視することとし、学歴資源、経済資源等の社会階層と、ソーシャル・サポートの配分状況の関連を浮かび上がらせることを試みる。社会的資源の配分状況という問題関心からは、従来から社会階層との関連で社会的勢力(今田・原 1979, 平松 1987)や関係的資源(村瀬 1998, 1999)、交際やネットワークのあり方(岡本 1989, 前田・目黒 1990, 村澤 1998, 林 2000, 菅野 2000)について研究されてきたが、本研究では人々の日常生活において身近なソーシャル・サポートをとりあげる。特に、職業分類ごとの差異を考慮に入れながら、学歴と収入がソーシャル・サポートに対して及ぼす効果を一つのモデルで同時に分析する。このように、諸効果を一つのモデルで統合的に扱うことにより、ソーシャル・サポートに対する社会階層の効果を分析する。

(2) 社会階層から見るソーシャル・サポート

社会階層と社会的ネットワークについては様々な研究がなされており、社会階層が高いほど、ネットワークのサイズが大きく、多様性が高く、密度が低いということ等が明らかになっている(Campbell *et al.* 1986)。社会的ネットワークは、具体的には、個人をとりまわっている家族や友人、近隣などとの対人関係網であるが、特に、情緒(表出)的、手段的、経済的、その他様々な援助が得られるようなサポーティブな社会環境の構築状態をサポート・ネットワークとして把握される。その際、ネットワークの規模や構造よりも得られるサポート自体を対象とするとソーシャル・サポートについての分析が重要となってくる。ソーシャル・サポートは幅広い内容を含んでおり、その定義については様々な議論がなされ一概には定義できないが、本研究では、「対人関係から得られる、手段的・表出的援助」(稲葉 1992)とする。

さらに、ソーシャル・サポートの指標も様々であり、どのような指標を用いたのかによってファインディングスの意味が変わってくる。本研究では、いわゆる“認知(知覚)されたサポート”を扱うことになる。ソーシャル・サポートの指標の一部は、現在実際にはサポートを受けていなかったり、ある特定の状況を想定して念頭においたものであることがある。つまり、期待・想定される潜在的援助であり、回答が主観的であるという指摘がある。しかし、主観的にせよ、サポートが期待できる・期待できないという回答は、潜在的なサポートの動員可能性を示す指標としてやはり重要である。サポートが得られる、あるいは得ら

表 1: ソーシャル・サポートの 28 の個別項目

ソーシャル・サポートの種類	ソーシャル・サポートの供給源						
	M ₁ 配偶者	M ₂ 親・ 兄弟 姉妹	M ₃ 子供・ その 配偶者	M ₄ その他 の 親族	M ₅ 友人や 職場の 同僚	M ₆ 近所 (近隣) の人	M ₇ 専門家・ サービス 機関
A.相談: 問題を抱えて、 落ち込んだり、混乱したとき	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	A ₇
B.経済: 急いでお金(30万円程度)を 借りなければならないとき	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	B ₅	B ₆	B ₇
C.病気: 病気や事故で、 どうしても人手が必要なとき	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅	C ₆	C ₇
D.介護: あなたが寝たきりなどで、 介護を必要とするようになったとき	D ₁	D ₂	D ₃	D ₄	D ₅	D ₆	D ₇

※質問は、「以下のような問題で援助や相談相手が欲しいとき、どのような人や機関を頼りにしますか。それぞれの場合について、あてはまるものに○をつけてください(○はいくつでも)」と尋ね、その有無を測定している。

れないという認識は、その背後にそのような社会的状況が横たわっていると考えられるからである。本研究では、ソーシャル・サポートの様々な指標の関連を探り、また、社会階層とソーシャル・サポートの関連について分析を行う。

2. データと変数

分析に用いるデータは、日本家族社会学会が全国を対象に実施した NFR データである。対象は 1998 年 12 月時点で満 28 ～ 77 歳の男女であり、抽出法は層化多段抽出法、標本数は 10500、訪問留置法によって 1999 年 1 月～2 月中に実施された。有効回収率は、全体で 6985 (回収率 66.5%)、そのうち男性は 3323 人、女性は 3662 人である(稲葉 2000)。

ソーシャル・サポートの操作化にあたり、質問紙では具体的に表1のような 28 項目で測定してある。つまり、異なった特徴を持つ四種類のサポート内容(相談、経済、病気、介護)について、供給源として、血縁など最も身近な家族や親戚から始まり、地縁、選択縁・職縁・社縁へと家族外に社会関係が広がり、さらに行政や専門機関まで測定範囲を徐々に広げていることが特徴である(石原 2000)。ソーシャル・サポートについては、サポート供給源ごとにサポートの内容が異なり、サポートの内容によってサポート供給源が柔軟に変化することが指摘されている。このような先行研究に対し、どのような内容(相談、経済、病気、介護)に対して、どのような供給源(配偶者、親・兄弟、子供・その姉妹、その他の配偶者、友人や職場の親族、近所(近隣)の人、同僚、専門家・サービス機関)からサポートを得ることが出来るか、を測定する項目が NFR 調査において設定されている。

表 2: ソーシャル・サポートの個別項目の単純集計表

		男性		女性	
		あり	なし	あり	なし
1. 配偶者	A ₁ : 相談	2211 (68.3)	1026 (31.7)	2155 (60.5)	1407 (39.5)
	B ₁ : 経済	1353 (41.8)	1884 (58.2)	1532 (43.0)	2030 (57.0)
	C ₁ : 病気	1886 (58.3)	1351 (41.7)	1631 (45.8)	1931 (54.2)
	D ₁ : 介護	2280 (70.4)	957 (29.6)	1813 (50.9)	1749 (49.1)
2. 親・ 兄弟姉妹	A ₂ : 相談	896 (27.7)	2341 (72.3)	1326 (37.2)	2236 (62.8)
	B ₂ : 経済	1315 (40.6)	1922 (59.4)	1492 (41.9)	2070 (58.1)
	C ₂ : 病気	1457 (45.0)	1780 (55.0)	1794 (50.4)	1768 (49.6)
	D ₂ : 介護	883 (27.3)	2354 (72.7)	1579 (44.3)	1983 (55.7)
3. 子供・ その 配偶者	A ₃ : 相談	395 (12.2)	2842 (87.8)	880 (24.7)	2682 (75.3)
	B ₃ : 経済	422 (13.0)	2815 (87.0)	698 (19.6)	2864 (80.4)
	C ₃ : 病気	877 (27.1)	2360 (72.9)	1417 (39.8)	2145 (60.2)
	D ₃ : 介護	883 (27.3)	2354 (72.7)	1579 (44.3)	1983 (55.7)
4. その他 の親族	A ₄ : 相談	131 (4.0)	3106 (96.0)	141 (4.0)	3421 (96.0)
	B ₄ : 経済	135 (4.2)	3102 (95.8)	91 (2.6)	3471 (97.4)
	C ₄ : 病気	303 (9.4)	2934 (90.6)	206 (5.8)	3356 (94.2)
	D ₄ : 介護	103 (3.2)	3134 (96.8)	101 (2.8)	3461 (97.2)
5. 友人や 職場の 同僚	A ₅ : 相談	852 (26.3)	2385 (73.7)	1138 (31.9)	2424 (68.1)
	B ₅ : 経済	159 (4.9)	3078 (95.1)	82 (2.3)	3480 (97.7)
	C ₅ : 病気	382 (11.8)	2855 (88.2)	363 (10.2)	3199 (89.8)
	D ₅ : 介護	46 (1.4)	3191 (98.6)	85 (2.4)	3477 (97.6)
6. 近所 (近隣)の人	A ₆ : 相談	73 (2.3)	3164 (97.7)	184 (5.2)	3378 (94.8)
	A ₆ : 経済	10 (0.3)	3227 (99.7)	21 (0.6)	3541 (99.4)
	A ₆ : 病気	165 (5.1)	3072 (94.9)	250 (7.0)	3312 (93.0)
	A ₆ : 介護	42 (1.3)	3195 (98.7)	54 (1.5)	3508 (98.5)
7. 専門家 ・サービス 機関	A ₇ : 相談	167 (5.2)	3070 (94.8)	106 (3.0)	3456 (97.0)
	B ₇ : 経済	683 (21.1)	2554 (78.9)	506 (14.2)	3056 (85.8)
	C ₇ : 病気	274 (8.5)	2963 (91.5)	351 (9.9)	3211 (90.1)
	D ₇ : 介護	666 (20.6)	2571 (79.4)	1074 (30.2)	2488 (69.8)

*数値は度数、括弧内は%

3. ソーシャル・サポート項目の記述的分析

(1) ソーシャル・サポート項目の単純集計表

まず、これらの 28 の質問項目の単純集計を求めたのが表2である。配偶者からサポートを期待できると回答した割合を見ると、男性では相談 68.3%、経済 41.8%、病気 58.3%、介護 70.4%、女性では、相談 60.5%、経済 43.0%、病気 45.8%、介護 50.9% となっており、どの項目においても大きな値を示している。また、経済サポート以外で、女性に比べて男性の方が配偶者からのサポートを期待する傾向がある。特に配偶者から介護サポートを得られるという期待が、女性に比べて男性において高い。

親・兄弟姉妹からサポートを期待できると回答した割合を見ると、男性では相談 27.7%、経済 40.6%、病気 45.0%、介護 27.3%、女性では、相談 37.2%、経済 41.9%、病気 50.4%、介護 44.3% となっており、どの項目も大きな値を示している。また、全般的にどのサポートにおいても、男性に比べて女性の方が親・兄弟姉妹からのサポートを期待できる傾向がある。特に親・兄弟姉妹から介護サポートを得られるという期待が、男性に比べて女性において高い。

子供・その配偶者からサポートを期待できると回答した割合を見ると、男性では相談 12.2%、経済 13.0%、病気 27.1%、介護 27.3%、女性では、相談 24.7%、経済 19.6%、病気 39.8%、介護 44.3% となっており、やや小さな値を示すようになる。また、いずれのサポートにおいても、男性に比べて女性の方が子供・その配偶者からのサポートを期待できる傾向がある。

その他の親族からサポートを期待できると回答した割合を見ると、男性では相談 4.0%、経済 4.2%、病気 9.4%、介護 3.2%、女性では、相談 4.0%、経済 2.6%、病気 5.8%、介護 2.8% であり、非常に小さな値を示すようになる。男女ともににおいて、その他の親族に対してはあまりサポートが期待されないことが分かる。

友人や職場の同僚からサポートを期待できると回答した割合を見ると、男性では相談 26.3%、経済 4.9%、病気 11.8%、介護 1.4%、女性では、相談 31.9%、経済 2.3%、病気 10.2%、介護 2.4% となっており、友人や職場の同僚に対しては相談等のサポートが主に期待されており、相談以外のサポートについては非常に小さな値を示している。

近所(近隣)の人からサポートを期待できると回答した割合を見ると、男性では相談 2.3%、経済 0.3%、病気 5.1%、介護 1.3%、女性では、相談 5.2%、経済 0.6%、病気 7.0%、介護 1.5% であり、女性の方が若干値が大きいものの男女ともにかなり低く、近所(近隣)の人からのサポートは期待されていないことが分かる。

専門家・サービス機関からサポートを期待できると回答した割合を見ると、男性では相談 5.2%、経済 21.1%、病気 8.5%、介護 20.6%、女性では、相談 3.0%、経済 14.2%、病気 9.9%、介護 30.2% となっており、小さな値を示している。ただし、男女ともに経済と介護において専門家・サービス機関からのサポートを期待していることが分かる⁽¹⁾。

(2) クロス表から見るソーシャル・サポート項目間の関連

(a) 供給源ごとに見るソーシャル・サポートの内容

次に、サポートについての 28 の測定項目について、全ての組み合わせのクロス表を作成し、項目間の関連を調べた。分析は省略するが、クロス表による検討の結果、正の関連や負の関連等様々な結果が見られた。

まず、サポートの供給源ごとに項目の関連を見る。例えば、配偶者に関わる項目同士では対角のセルの度数が大きく、配偶者から何らかのサポートが得られている場合に他のサポートも得られる傾向が見られる。配偶者からいずれかのサポートが得られれば他のサポートも得られるというこのような傾向は、親・兄弟姉妹、子供夫婦などの項目同士の関連においても同様である。つまり、これらは人間関係の構築そのものを問うている側面がある。配偶者や子供夫婦等がない場合には、当然これらはサポートの選択肢にはあがらず、結果として項目間の関連を強めている。逆に、親世代からのサポートと子世代からのサポー

表3: ソーシャル・サポートの個別項目間の関連 (CramerのV係数)

性別	項目	1. 配偶者			2. 親・兄弟姉妹			3. 子供・その実姉			4. その他の親族			5. 友人や職場の同僚			6. 近所(近隣)の人			7. 専門家・サービス機関			
		相談	経済	病気	介護	相談	経済	病気	介護	相談	経済	病気	介護	相談	経済	病気	介護	相談	経済	病気	介護		
男性	1. 配偶者	A1 相談																					
		B1 経済	.46																				
		C1 病気	.56	.48																			
		D1 介護	.63	.41	.68																		
	2. 親・兄弟姉妹	A2 相談	-.15	-.08	-.05	-.10																	
		B2 経済	-.07	-.21	-.09	-.05	.45																
		C2 病気	-.03	-.06	-.13	-.03	.45	.53															
		D2 介護	-.16	-.08	-.09	-.18	.43	.41	.54														
	3. 子供・その配偶者	A3 相談	-.03	-.01	-.02	-.01	-.03	-.12	-.10	-.07													
		B3 経済	.01	-.07	-.02	-.03	-.06	-.18	-.18	-.12	.56												
		C3 病気	.11	.05	.00	.01	-.02	-.14	-.15	-.12	.48	.48											
		D3 介護	.13	.07	.08	-.02	.06	-.05	-.01	-.04	.40	.36	.64										
	4. その他の親族	A4 相談	-.04	-.01	.00	-.02	.15	.05	.10	.07	.11	.00	.06	.06									
		B4 経済	.00	.04	-.01	-.01	.08	.05	.02	.04	.04	-.01	.05	.06	.36								
		C4 病気	.04	.04	.06	.04	.17	.11	.17	.14	.02	-.02	.04	.12	.33	.38							
		D4 介護	.00	.00	.02	-.02	.11	.08	.10	.18	.05	.00	.06	.09	.26	.30	.42						
	5. 友人や職場の同僚	A5 相談	-.18	-.02	-.02	-.07	.16	.20	.22	.24	-.10	-.15	-.10	-.02	.04	.05	.15	.07					
		B5 経済	-.08	-.04	-.03	-.06	.03	.01	.03	.07	-.01	-.05	-.03	-.03	.00	.07	.03	.05	.24				
		C5 病気	-.07	-.03	-.05	-.06	.16	.15	.12	.19	-.05	-.10	-.08	-.01	.04	.05	.16	.10	.30	.25			
		D5 介護	-.05	-.01	-.03	-.07	.07	.05	.06	.11	.02	-.04	.01	.00	.07	.05	.08	.17	.15	.13	.27		
	6. 近所(近隣)の人	A6 相談	.01	-.02	.02	.01	.07	-.01	.03	.02	.12	.04	.09	.09	.20	.06	.08	.08	.03	-.01	.06	.08	
B6 経済		.03	.00	.01	.01	.02	-.01	-.01	-.01	.01	.05	.02	-.01	.07	-.02	.02	.01	.06	.01	.13	.07		
C6 病気		.04	.00	.04	.04	.09	.06	.09	.06	.08	-.02	.06	.11	.09	.08	.17	.11	.10	.03	.19	.09	.14	
D6 介護		.02	.00	.02	.00	.06	.03	.04	.05	.11	.04	.08	.10	.10	.06	.07	.16	.05	.04	.09	.19	.32	
7. 専門家・サービス機関	A7 相談	-.05	.01	.03	-.01	.03	-.02	.01	.00	.05	.03	.06	.06	.11	.04	.08	.04	.04	-.01	.02	.02	.13	
	B7 経済	-.03	-.21	.01	-.01	.01	-.15	.04	.01	-.03	-.12	.01	.04	.04	-.01	.09	.02	.14	-.02	.10	.03	.08	
	C7 病気	.01	.01	-.02	-.05	.06	-.02	-.04	-.01	.08	.02	.04	.03	.07	.04	.05	.03	.06	.02	.04	.11	.00	
	D7 介護	.04	.04	.03	-.12	.09	.05	.08	.00	.07	.01	.12	.04	.09	.09	.11	.04	.11	.04	.10	.03	.08	
女性	1. 配偶者	A1 相談																					
		B1 経済	.52																				
		C1 病気	.56	.53																			
		D1 介護	.58	.47	.71																		
	2. 親・兄弟姉妹	A2 相談	-.04	-.01	.11	.08																	
		B2 経済	-.02	-.20	.04	.06	.42																
		C2 病気	.04	-.01	.03	.13	.36	.51															
		D2 介護	.01	.04	.11	.10	.35	.40	.55														
	3. 子供・その配偶者	A3 相談	-.15	-.04	-.05	-.09	-.03	-.18	-.17	-.12													
		B3 経済	-.16	-.17	-.15	-.19	-.10	-.25	-.26	-.17	.55												
		C3 病気	-.02	.01	-.10	-.11	-.08	-.24	-.31	-.22	.54	.49											
		D3 介護	.01	.03	-.03	-.10	-.03	-.15	-.15	-.14	.46	.40	.63										
	4. その他の親族	A4 相談	-.03	.00	.03	.01	.07	.06	.06	.08	.08	.05	.03	.05									
		B4 経済	-.02	-.03	-.03	-.02	.03	.01	.01	.03	.05	.02	.02	.04	.31								
		C4 病気	.01	.02	.04	.04	.10	.12	.10	.13	.05	.01	-.01	.02	.29	.35							
		D4 介護	-.02	.00	.01	.02	.10	.08	.08	.14	.04	.04	-.01	.02	.32	.29	.48						
	5. 友人や職場の同僚	A5 相談	-.13	-.04	.07	.06	.17	.28	.31	.28	-.12	-.17	-.18	-.12	.05	.02	.09	.06					
		B5 経済	-.05	-.05	-.04	-.03	.03	.04	.04	.06	-.01	-.01	-.05	-.02	.05	.07	.05	.05	.16				
		C5 病気	.00	.01	.05	.05	.11	.15	.13	.17	-.03	-.06	-.09	-.05	.05	.04	.10	.07	.34	.27			
		D5 介護	-.01	.00	.04	.03	.06	.10	.09	.13	.00	-.02	-.03	.00	.02	.03	.07	.13	.17	.22	.35		
	6. 近所(近隣)の人	A6 相談	.03	.04	.08	.09	.11	.08	.06	.07	.08	.04	.03	.05	.10	.12	.06	.07	.12	.04	.11	.07	
B6 経済		-.01	.00	.01	.01	.05	.03	.02	.03	.07	.06	.01	.04	.13	.17	.08	.08	.00	.11	.02	.08	.20	
C6 病気		.08	.09	.10	.11	.11	.10	.10	.09	.07	.02	.00	.06	.08	.09	.13	.11	.12	.06	.21	.17	.36	
D6 介護		.02	.03	.06	.06	.05	.04	.05	.08	.03	.03	.01	.05	.04	.02	.05	.12	.07	.07	.13	.35	.18	
7. 専門家・サービス機関	A7 相談	.00	.03	.04	.03	.04	.01	.01	.02	.04	.02	.02	.04	.07	.02	.03	.01	.01	.06	.03	.09	.01	
	B7 経済	-.01	-.15	.02	.02	.05	.10	.07	.03	-.01	-.14	-.03	-.03	.04	.01	.03	.01	.14	-.03	.08	.04	.03	
	C7 病気	.00	.03	-.01	-.04	.04	.00	-.09	-.05	.06	.01	-.04	-.04	.02	.05	.01	.01	.06	.01	.02	.00	.06	
	D7 介護	-.01	-.01	.00	-.12	.11	.05	.06	-.09	.05	.00	.01	-.15	.02	.04	.06	.00	.13	.02	.10	-.02	.06	

トの変数の関連のように、ライフステージに沿って対局に位置する変数同士の場合には、一方からサポートを得ていると他方からは得ていない傾向も見られた。また、親族、近所からのサポートについてはほとんどの人が得ていないため、これらの変数は分布が非常に偏っている。このように、ソーシャル・サポートを分析にするにあたりいくつか考慮すべきことがある。それは、ソーシャル・サポートが単に享受されていない場合と、構造的に享受が不可能な場合とが混ざって測定されていることである⁽²⁾ (石原 2000)。

サポートの指標同士の関連を探るための、以上のクロス表の分析結果を Cramer の V 係数を表す形でまとめると表3のようになる。下線を引いてある、表の対角の辺りを見ると、配偶者からのサポートの項目同士の間での強い正の関連(男性 0.41 ~ 0.68、女性 0.47 ~ 0.71)、親・兄弟姉妹からのサポートの項目同士の間での強い正の関連(男性 0.41 ~ 0.54、女性 0.35 ~ 0.55)、子供・その夫婦からのサポートの項目同士の間での強い正の関連(男性 0.36 ~ 0.64、女性 0.40 ~ 0.63)が確認できる。これは、配偶者、親・兄弟姉妹、子供・その夫婦のいずれかの供給源から何らかのサポートを得ている場合は、その同じ供給源から他のサポートも得ている傾向が強く見られることを示している。

これに対して、同じ供給源の項目同士でありながら、その他の親族からのサポートの項目同士の間でのやや弱い正の関連(男性 0.26 ~ 0.42、女性 0.29 ~ 0.48)、友人や職場の同僚からのサポートの項目同士の間でのやや弱い正の関連(男性 0.13 ~ 0.40、女性 0.16 ~ 0.35)、近所(近隣)の人からのサポートの項目同士の間でのやや弱い正の関連(男性 0.07 ~ 0.36、女性 0.15 ~ 0.36)、専門家・サービス機関からのサポートの項目同士の間でのやや弱い正の関連(男性 0.21 ~ 0.50、女性 0.15 ~ 0.45)等も確認できる。これは、親族、友人や職場の同僚、近所、専門家・サービス機関のいずれかの供給源から何らかのサポートを得ているとしても、同じ供給源からは他のサポートについては得る傾向がやや弱いことを示している。

さらに、配偶者、親・兄弟姉妹、子供・その配偶者からのサポートの項目の間には、負の関連が見られることも確認できる。たとえば、男性においては、配偶者からのサポートの項目群 (A_1, B_1, C_1, D_1) と親・兄弟姉妹からのサポートの項目群 (A_2, B_2, C_2, D_2) の間 (-0.03 ~ -0.21)、配偶者からのサポートの項目群 (A_1, B_1, C_1, D_1) と友人・職場の同僚からのサポートの項目群 (A_5, B_5, C_5, D_5) の間 (-0.01 ~ -0.18) にやや負の関連が見られる。また、親・兄弟姉妹からのサポートの項目群 (A_2, B_2, C_2, D_2) と子供・その配偶者からのサポートの項目群 (A_3, B_3, C_3, D_3) の間や、子供・その配偶者からのサポートの項目群 (A_3, B_3, C_3, D_3) と友人・職場の同僚からのサポートの項目群 (A_5, B_5, C_5, D_5) の間でも殆どが弱い負の関連を示している。このことは、配偶者からサポートを得ている場合には、親・兄弟姉妹と友人・職場の同僚からのサポートが減少する傾向にあり、また、子供・その配偶者からサポートを得ている場合には、親・兄弟姉妹や友人・職場の同僚からのサポートが減少する傾向を示している。

また、女性の場合は、男性と若干異なる傾向を示している。まず、親・兄弟姉妹からのサポートの項目群 (A_2, B_2, C_2, D_2) と子供・その配偶者からのサポートの項目群 (A_3, B_3, C_3, D_3) の間(-0.03 ~ -0.31)、子供・その配偶者からのサポートの項目群 (A_3, B_3, C_3, D_3) と友人・職場の同僚からのサポートの項目群 (A_5, B_5, C_5, D_5) の間(0.00 ~ -0.18)において、男生と同様に弱い負の関連が見られる。また、男性と異なる側面として、配偶者からのサポートの項目群 (A_1, B_1, C_1, D_1) と親・兄弟姉妹からのサポートの項目群 (A_2, B_2, C_2, D_2) の間(-0.20 ~ 0.13)、配偶者からのサポートの項目群 (A_1, B_1, C_1, D_1) と友人・職場の同僚からのサポートの項目群 (A_5, B_5, C_5, D_5) の間(-0.13 ~ 0.07)において、弱い正負の関連が入り乱れている。

(b) ソーシャル・サポートの内容ごとに見る供給源の幅広さ

他方で、サポートの内容ごとに項目の関連の強さを見ることも出来るが、関連は弱い。つまり、相談について、どれかの供給源からのサポートが得られるからと言って、他の供給源からもサポートを得られやすいとは限らない。この場合、どれかからサポートが得られていればとりあえず事足りるのであって、すべてからサポートを得なければならないと言うわけではない。例えば、バブルの時期に、何かの形でお金を使う際にある人は別荘を購入したり、ある人は家は買えないが高級な車は買う等、お金の使い道には選択肢があり得る。この場合、何かを買えば資金が減るため他のものは購入できなくなり、財同士はむしろトレードオフ関係にある。しかしながら、所有財を測定する際には、やはり全てを網羅して測定して財産と考えるべきである。このような場合、何かを所有していれば他も所有しているというような相関関係では捉えづらい。サポートについてもこのようなことが生じているとするならば、供給源を問うことなく全体としてサポートはどの程度享受されているのかという問の元に、項目を加算してサポート全体を測定することが重要であるといえる。

(3) 社会階層ごとに見るソーシャル・サポート項目の平均

全体の傾向、性別による違い等データの特徴については、援助源としては、配偶者が最も頼りにされており、次いで親・きょうだい期待されていること、また、期待される援助源がライフサイクルステージに伴って定住家族から生殖家族へと移り変わること、また、男性と女性では配偶者に頼る比率が異なっていること等、様々な興味深い指摘が既に石原(2000)によってなされている。ここでは、社会階層との関連について見ていく。

まず、28のサポートの項目それぞれに対して社会階層との関連はどのようなものであるのか、記述的分析を行う。その際、学歴、世帯収入⁽³⁾、職業ごとに、28の二値変数であるサポート項目それぞれの平均を求め、サポートがどの程度享受されているのか、その割

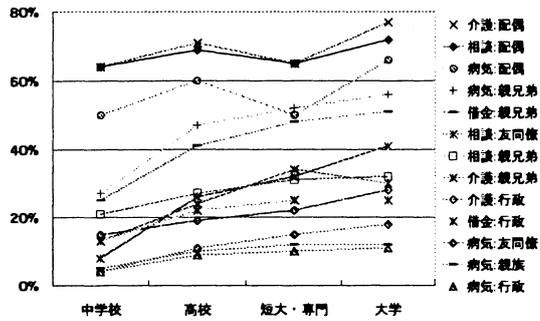


図 1: 学歴別のサポート享受率(男性)

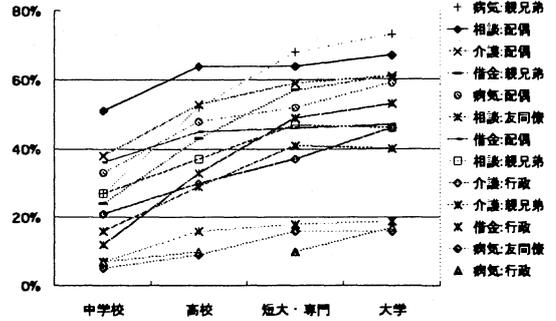


図 2: 学歴別のサポート享受率(女性)

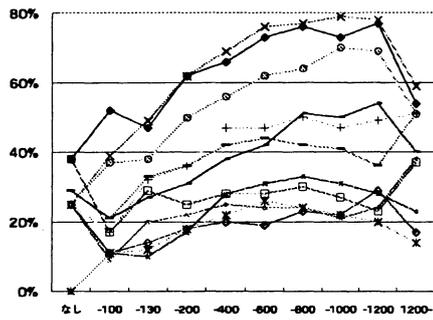


図 3: 世帯収入別のサポート享受率(男性)

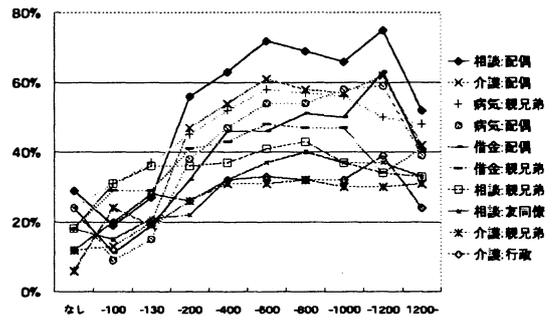


図 4: 世帯収入別のサポート享受率(女性)

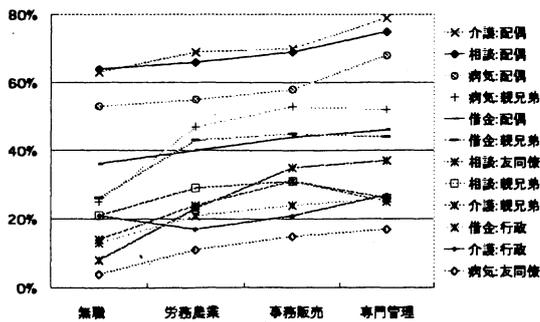


図 5: 職業別のサポート享受率(男性)

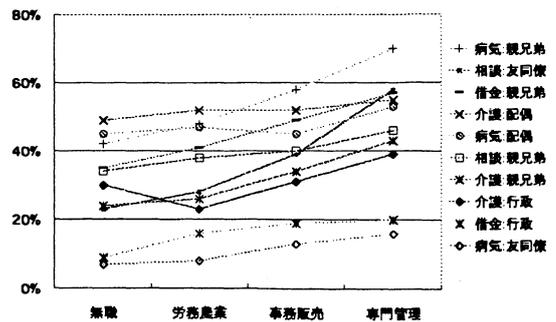


図 6: 職業別のサポート享受率(女性)

合を見た。その結果、男女を問わず、学歴が高くなるほど(図1、2)、世帯収入が高くなるほど(図3、4)、サポートを享受している人々の割合が高いことがグラフから見てとれる⁽⁴⁾。また、専門職・管理職においてサポートを享受していると回答する者の割合が最も高く、事務・販売職、労務・農業、無職の順に低くなることも分かる(図5、6)。このように、社会階層が高いほどサポートの享受率も高くなるという傾向が確認できる。

(4) 社会階層と四つのソーシャル・サポート

(a) ソーシャル・サポートの3相データ構造

NFR 調査データは、相談、経済、病気、介護、のそれぞれ四つの条件・領域について、配偶者、親・兄弟姉妹、子供・その夫婦、親族、友人、近所、専門家・サービス機関、という7種類の供給可能性(潜在的に動員可能かどうか)を尋ねている。このソーシャル・サポートの項目は、いわゆる3相データの構造になっている。社会学でしばしば用いられる多変量データは、変数×対象者という2相の構造となっており、それぞれの対象者が、複数の質問に対して回答を行っている。これに対して、3相データでは、変数×対象者×条件という構造となっている。つまり、対象者それぞれに対して、ある条件や領域や対象に対しての、何らかの反応や特性を測定するなどの3次元の構造を持つデータである⁽⁵⁾。NFR データにおいては、一人の人が4種類のサポート内容に渡って七つの供給源を答えており、対象者×サポートの内容×動員可能な供給源という構造を持つ3相データになっている。このような場合、ソーシャル・サポートを分析する際に、28の変数に対してそれぞれ個別分析を施すか、あるいは何らかの形で変数をまとめて分析がなされる。その際、いずれかの次元についてつぶして、サンプルを増やして分析することもしばしばなされる。

今回の場合、まず、4種類のソーシャル・サポートの内容をつぶして、7種類のサポート供給源について分析が出来る。つまり、本来は、1人の対象者に対して、例えば、配偶者から、相談、経済、病気、介護の4つのソーシャル・サポートが得られるかどうかを尋ねている。これを、配偶者から何らかのソーシャル・サポートが得られているかどうかに測定を読みかえ、4人の対象者が回答しているとみなす。この場合、サンプル数は元の対象者数の4倍となる。ただし、この分析方法においては、本来は1人の回答者が4種類のサポートに対して答えているという情報を考慮できない。

対照的に、サポート供給源の種類は問わずに供給源の種類をつぶせば、サポートの四つの種類について分析をすることもできる。この場合、サンプル数は元の対象者の7倍となる。ただし、この方法においても、1人の回答者が七つの供給源に対して答えている(1人の回答者は、それぞれの回答の際に独自傾向を持つ)という情報を考慮できない。

また、どちらの次元かという区別をせずに、28全ての変数に対してまとめて多変量解析を施すこともされる。ただし、ここでもサポートの内容と供給源の情報を考慮しないこと

になる。

以上をまとめると、サポートの内容についてつぶす分析では、サポートの内容に渡って同一回答者が4回答することになる。また、サポートの供給源についてつぶす分析では、潜在的動員可能サポート供給源の種類に渡って同一回答者が7回答していることになる。だが、別の回答者によって測定されたものとしてカウントされたデータとなる。だから、本来のデータの特徴を正確に生かして分析しているわけではないが、このようなデータの分析法の定番はなく、この分析法がしばしばなされる。あるいは、サポートの供給源や内容の区別をせずに、全ての変数を同時に分析することもなされるが、質問紙の構成段階での条件と変数という2次元の情報を生かすことが出来ない。本来ならば、サポートの供給源と内容とは変数のレベルが異なっており、そのことを分析に考慮することが望ましい⁽⁶⁾。

今回の分析対象として重要であるのは、ソーシャル・サポートを全体としてどの程度享受できるかという点である。1人の人が享受しているサポート全体を測定することを想定すると、個別のサポートの有無の集積として、全体として享受されているソーシャル・サポートを考えることが重要と言える。つまり、供給源を特定することに重きをおくのではなく、いかなる供給源であろうが、とにかくサポートが得られるのかどうかということを、社会的資源の分配問題との関連で重視する。そこで本研究では、28の二値変数を四つのソーシャル・サポートにまとめ、それら四つのソーシャル・サポートに対して共分散構造モデル(構造方程式モデリング, SEM)を適用することにする⁽⁷⁾。加算を行うことにより、個別の変数の細かい動きについて目をつぶることになる。つまり、ある項目の値が高くて他の項目の値が小さい場合でも加算するため、その違いや項目間の関連を無視し、全体の合計の値自体に分析の焦点をあてることとなる。このため、片方の値が高ければ他方の値が低いというトレード・オフ関係にある変数同士であっても、合計するとその関係は不明となる。ただし、総体としてのサポートが多いか少ないかという点に関心を持つ今回の分析では、全ての測定項目の情報を生かすために加算をする⁽⁸⁾。このようにすることで、28の二値変数全ての情報を生かすことが出来(SEM では28全ての変数の情報を生かすモデル構築は実質的に困難)、かつSEMの枠組みによって相関関係の希薄化を防ぐことが出来る(尺度化に基づくスコアを用いる重回帰分析やパス解析では、誤差が入るために変数間の相関関係が弱いモデルとなる)⁽⁹⁾。

(5) 四つのソーシャル・サポートの記述的分析

本研究では、学歴、世帯収入、職業とソーシャル・サポートの関連を見ていく。その際に、情緒的な側面を捉える“相談”、手段的な側面を捉える“経済”、“病気”、“介護”の4種類それぞれについて、配偶者から専門家・サービス機関までの7種類の供給源のうちいくつを頼りにするかという合計(最小値0、最大値7)を求めて、これらを、相談サポート、経済サポート、病気サポート、介護サポートという4変数とした⁽¹⁰⁾。こうして加算によ

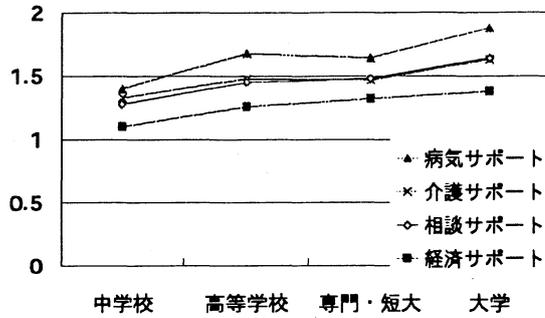


図 7: 学歴別のサポートの平均(男性)

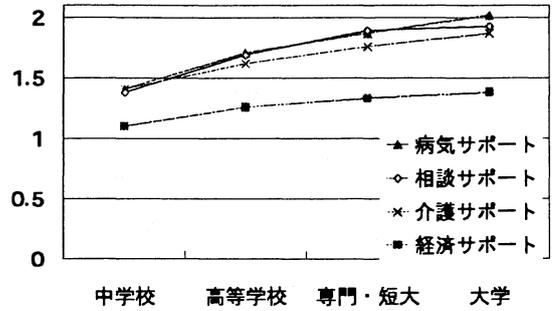


図 8: 学歴別のサポートの平均(女性)

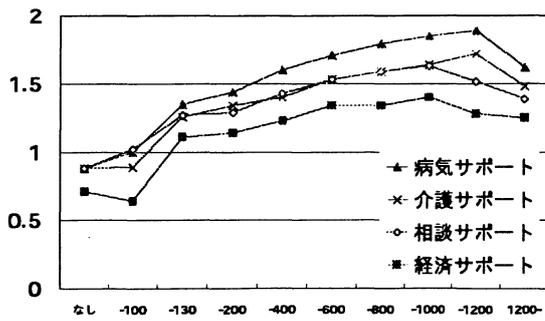


図 9: 世帯収入別のサポートの平均(男性)

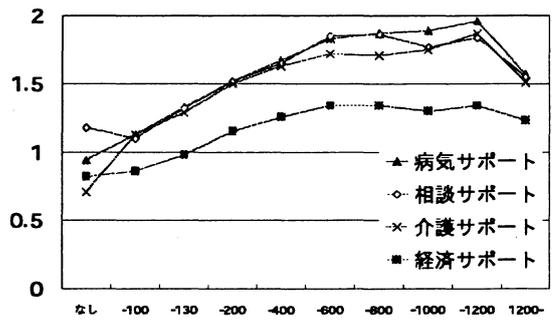


図 10: 世帯収入別のサポートの平均(女性)

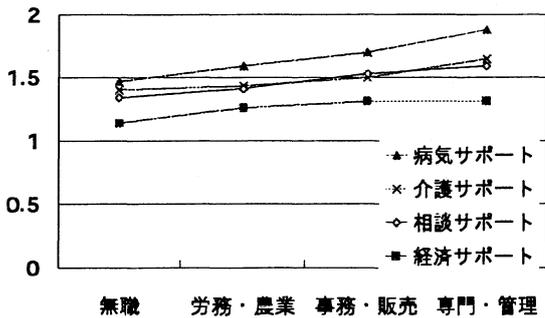


図 11: 職業別のサポートの平均(男性)

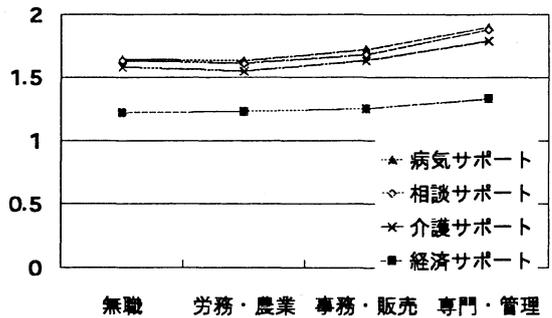


図 12: 職業別のサポートの平均(女性)

て求めたソーシャル・サポートの記述的分析を行う。

まず、ソーシャル・サポートは学歴ごとにどのように異なるのか、学歴ごとにその平均をグラフに表した（男性は図7、女性は図8）。男女共に、学歴が高くなるほど、いずれのサポートも増加している様子が見てとれる。特に、病気サポートはどの学歴でも値が高く、介護サポートと相談サポートが続き、経済サポートはどの学歴においても、値が低めである。また、四つのソーシャル・サポート間におけるこのような関係は、以降の世帯収入や職業との関連においても大体該当する。次に、年間世帯収入ごとに、ソーシャル・サポートの平均をグラフに表した(男性は図9、女性は図10)。男女共に、ほぼ、世帯収入が高くなるほどソーシャル・サポートが増大している傾向が見られる。そして、職業カテゴリーごとにソーシャル・サポートの平均を見た。その結果、男女共に、無職から労務農業、事務販売、専門管理、の順にソーシャル・サポートが多くなる傾向が見られた⁽¹¹⁾。以上の記述的分析より、男女共において、学歴、世帯収入、職業という社会階層の基本的な軸においてより恵まれた社会的位置を占めるに従い、ソーシャル・サポートもより多く享受していることが分かった。

4. 社会階層とソーシャル・サポートの多母集団解析の簡便法

(1) 変数

以上の記述的分析を経た上で、社会階層とソーシャル・サポートについてSEMを用いる分析を行う。まず、社会階層の一つの側面として、連続変数で表される社会経済的地位がある。ここでは、社会的な地位の一側面として、学歴⁽¹²⁾、そして、経済的地位を表す側面として世帯収入⁽¹³⁾をとりあげた。分析においては、これら二つの観測変数の背後に社会経済的地位という潜在変数を想定してモデル化した。

また、以上とは異なる重要な側面として、職業がある。職業については、専門・技術系の職業、管理的職業、事務・営業系の職業、販売・サービス系の職業、技能、労務、作業系の職業、農林漁業職のいずれに該当するかという形で、カテゴリカルな変数として測定されている。このため、社会階層研究で重要である職業威信スコア(直井 1979)を用いる分析はできないが、この情報を元に、専門・管理的職業のダミー変数、事務・販売的職業のダミー変数、労務・農業的職業のダミー変数、の三つのダミー変数を作成して⁽¹⁴⁾、無職を基準にして職業の効果を探ることとした⁽¹⁵⁾。

(2) 社会階層とソーシャル・サポートについての多母集団解析の簡便法

社会階層とソーシャル・サポートの因果構造について多母集団解析の簡便法による分析を行った。男性の分析結果は図13、女性の分析結果は図14である。モデルの適合度を見ると、まず、男性では、 $\chi^2 = 166.041$ 、d.f. = 20、CFI = 0.983、AGFI = 0.973、GFI = 0.988、

表 4: 潜在変数と観測変数の相関

男性					
	専門管理	事務販売	労務農業	社会経済的地位	ソーシャルサポート
専門管理	1.00				
事務販売	-.31	1.00			
労務農業	-.37	-.41	1.00		
社会経済的地位	.66	.23	-.37	1.00	
ソーシャルサポート	.12	.04	-.06	.32	1.00

女性					
	専門管理	事務販売	労務農業	社会経済的地位	ソーシャルサポート
専門管理	1.00				
事務販売	-.21	1.00			
労務農業	-.12	-.26	1.00		
社会経済的地位	.47	.19	-.20	1.00	
ソーシャルサポート	.08	.02	-.02	.34	1.00

表 5: 多母集団解析簡便法における潜在変数の平均

男性											
	専門管理	事務販売	労務農業	潜在変数の平均		観測変数の平均					
				社会経済的地位	ソーシャルサポート	学歴	世帯収入	相談サポート	経済サポート	病気サポート	介護サポート
専門管理職	1	0	0	308	.26	3.3	308	.26	.18	.37	.29
事務販売職	0	1	0	190	.16	2.0	190	.16	.11	.23	.18
労務農業	0	0	1	62	.07	0.7	62	.07	.05	.10	.08
無職	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

女性											
	専門管理	事務販売	労務農業	潜在変数の平均		観測変数の平均					
				社会経済的地位	ソーシャルサポート	学歴	世帯収入	相談サポート	経済サポート	病気サポート	介護サポート
専門管理職	1	0	0	214	.22	2.4	214	.22	.13	.26	.22
事務販売職	0	1	0	71	.05	.8	71	.05	.03	.06	.05
労務農業	0	0	1	-23	-.01	-.3	-23	-.01	-.01	-.01	-.01
無職	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

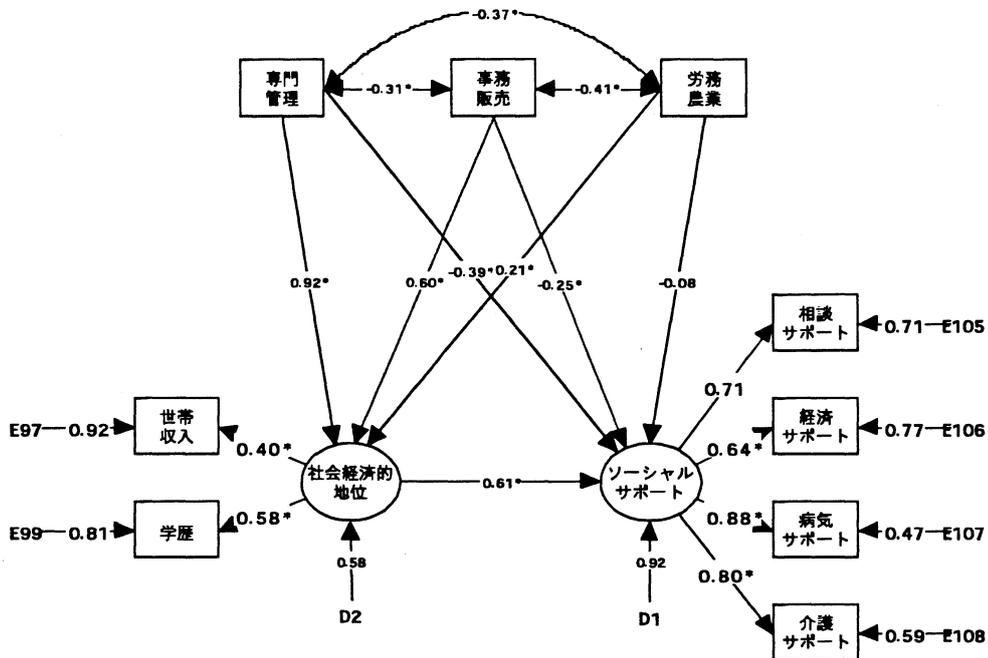


図 13: 社会階層とソーシャル・サポートの多母集団解析簡便法(男性)

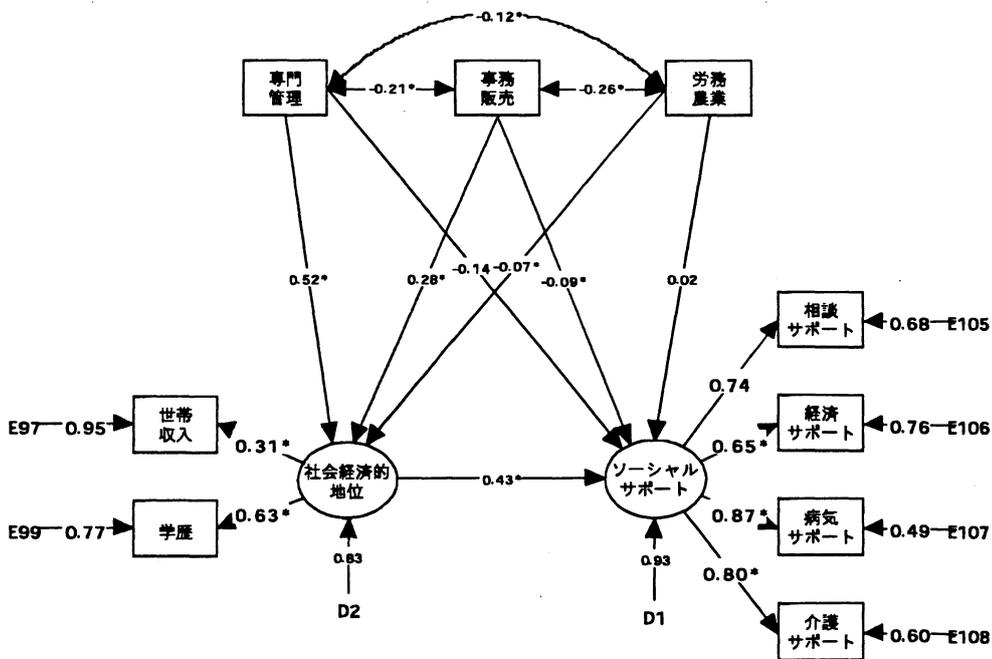


図 14: 社会階層とソーシャル・サポートの多母集団解析簡便法(女性)

RMSEA = 0.048。女性では、 $\chi^2 = 76.137$ 、d.f. = 20、CFI = 0.992、AGFI = 0.989、GFI = 0.995、RMSEA = 0.029。サンプル数が多いことを考慮するとどちらのモデルも適合度はよい。なお、図には標準化解を示してある。

因果モデルでは、モデルにおいて二つの潜在変数が用いられている(図13、14)。まず、社会経済的地位という潜在変数が世帯収入と学歴という二つの観測変数を規定している。そして、ソーシャル・サポートという潜在変数が、相談サポート、経済サポート、病気サポート、介護サポートという四つの観測変数を規定している。そして潜在変数から観測変数へのどのパスも十分に大きな正の値を示し、1%有意である。また、社会経済的地位からソーシャル・サポートへの直接効果は男性で0.61、女性で0.43(いずれも1%有意)と大きく、特に男性において大きな値を示している。なお、モデルにおける潜在変数と観測変数の相関係数については、表4に示してある。二つの潜在変数、社会経済的地位とソーシャル・サポートの相関を見ると、男性においては0.32、女性においては0.34であり、男女差はあまり見られない。つまり、職業を考慮せずに単純に相関を見ると男女差は分からないが、多母集団解析の簡便法を適用することによって、男性の方が社会経済的地位とソーシャル・サポートの間の関連が強いことが判明したことになる。

さらに、多母集団解析簡便法においては、専門・管理職、事務・販売職、労務・農業、無職、の四つの母集団ごとそれぞれの分析結果を一つのモデルで一度に表している。具体的には、社会経済的地位とソーシャル・サポートという二つの潜在変数に対して、専門・管理職、事務・販売職、労務・農業、という三つのダミー変数が効果を与えるという形で分析に投入することで四つの母集団ごとの分析が実現される。ここで、図13、14におけるダミー変数のパス係数は切片の効果を表し、ダミー変数に該当する母集団において、潜在変数の切片がそれだけ影響を受ける値となる。これらの結果をまとめた潜在変数と観測変数の平均については、表5に示してある。切片の効果の解釈については非標準化解が解釈が容易なため、表には非標準化解での平均の値を示してある。なお、図13において、専門管理から社会経済的地位へのパス係数が0.92と大きいのが、これは、多母集団解析簡便法においては切片の効果を表しているのであって、異常な値ではない。

図には示していないが、解釈の容易な非標準化解で示すと、社会経済的地位に対する切片の効果を相対的に見ると、男性では、基準である無職を0とした場合に、労務・農業で62、事務・販売職で190、専門・管理職で308と切片は職業に伴って大きな値を示すようになる。社会経済的地位に効果を与える他の変数はないので、これがそのまま、潜在変数の平均となる。女性では、基準である無職を0とした場合に、労務・農業で-23、事務・販売職で71、専門・管理職で214、となっており、労務・農業において社会経済的地位はもっとも小さな値を示す。

ソーシャル・サポートの切片についても、解釈の容易な非標準化解で示すと、男性においては、基準の無職を0とした場合に、労務・農業で-0.105、事務・販売職で-0.379、専

門・管理職で -0.615、と、切片は職業に伴って低い値を示すようになる。このことは一見奇妙な結果に思えるかも知れないが、社会経済的地位が同じであるというコントロールをした状況においては無職の方がサポートを享受していることを示している。また、女性ではソーシャル・サポートの切片は、基準の無職を 0 とした場合に労務・農業が 0.051 であり、事務・販売職が -0.140、専門・管理職が -0.363 と無職と労務・農業で切片が最も大きな値を示し、事務・販売職、専門・管理職と職業に伴って低い値を示している。

さらに、ソーシャル・サポートにおいては、社会経済的地位を介した間接効果もあり、潜在変数の平均はダミー変数の総合効果として表される(表5)。その結果、ソーシャル・サポートの平均は男性において、基準の無職を 0 とした場合に、労務・農業で 0.07、事務・販売職で 0.16、専門・管理職で 0.26、と職業に伴って、平均は大きな値を示すようになる。この結果はこれまでの記述的分析で確認してきたとおりである。そして女性においては、ソーシャル・サポートの平均は、基準の無職を 0 とした場合に労務・農業が -0.01、事務・販売職が 0.05 であり、専門・管理職の平均のみ 0.22 と大きな値を示している。このように、男性ではソーシャル・サポートの平均が職業に伴ってほぼ階段状に異なるのに対し、女性では専門・管理職において平均が高くなっている点が異なっている。

表5から、職業ごとに観測変数の平均についても読みとれる。学歴年数について見ると、男性では基準である無職を 0 とした場合に、労務・農業で 0.7 年、事務・販売職で 2.0 年、専門・管理職で 3.3 年、平均として高くなる傾向がある。また、世帯収入については、基準である無職を 0 とした場合に、労務・農業で 62 万、事務・販売職で 190 万、専門・管理職で 308 万、平均として高くなる傾向がある。このように、男性では職業に伴って学歴と収入が変化する。他方、女性においては基準である無職を 0 とした場合に、労務・農業で -0.3 年、事務・販売職で 0.8 年、専門・管理職で 2.4 年、平均として高くなる傾向がある。また、世帯収入については、基準である無職を 0 とした場合に、労務・農業で -23 万、事務・販売職で 71 万、専門・管理職で 214 万、平均として高くなる傾向がある。このように女性では、専門・管理職において学歴と収入が特に高い傾向が見られ、職業による効果が男性とは若干異なっている。

5. 議論

本研究では、社会的資源の不平等な配分状況である社会階層と、個人のパーソナルな“認知(知覚)された”ソーシャル・サポートについての関連を分析した。その結果、学歴、収入、職業のいずれの変数も重要な効果を持っていた。特に、学歴、収入、職業を用いただけのシンプルなモデルで分析を行ったが、ソーシャル・サポートに対する決定係数は、男性で 0.15、女性で 0.14 であり、社会階層によって効果を受ける程度は男女共に大体同じであった。また、社会経済的地位とソーシャル・サポートの相関係数は、男性は 0.32、女性は 0.34 であった。しかし、職業を考慮した多母集団解析簡便法の分析結果によると、社会

経済的地位がソーシャル・サポートに与える直接効果は男性で 0.62、女性で 0.43であり、男性において直接効果は強かった。また、男性では職業に伴ってソーシャル・サポートの平均が移り変わるが、女性では専門・管理的職業での違いが特徴的であった。本研究で扱ったモデルは男女共に同じモデルである。どちらのモデルも適合度は悪くないことから、男女いずれにおいてもソーシャル・サポートに対する社会階層の効果が重要であると言える。社会階層は、人々を違うように分けた層であり、その意味では社会階層に伴ってソーシャル・サポートのあり方も違って当然であるという考えもあるかも知れない。しかし、分析は省略するが、学歴、世帯収入、そして、相談・経済・病気・介護の四つのソーシャル・サポート、これらを一つの潜在変数でまとめる確証的因子分析を行ったところ、適合度が若干劣っており、さらに、学歴と世帯収入に対する因子負荷量はかなり小さかった⁽¹⁶⁾。このことは、学歴や世帯収入で表される社会階層と、ソーシャル・サポートの享受についての主観的評価で表される層とは、完全に一致するというよりも、二つの概念に分ける方が適切であることをデータは支持していると言える。また、しばしば指摘されることだが、因果の方向性という問題がある。複雑な現実社会においては、社会階層とソーシャル・サポートは、因果方向が完全に一方向に限定されるものではないといえる。しかし、本研究の問題関心は、社会階層という軸に沿って、ソーシャル・サポートのあり方がどのように異なっているのかという点である。いずれにせよ、社会的資源の分配状況という問題関心から、ソーシャル・サポートの研究において社会構造の中核を占める社会階層という軸が重要であると言える。

注

(1) なお、ソーシャル・サポートの男女差について見ると、男性と女性とで若干の差が見られる。配偶者からサポートを期待できると回答した割合を見ると、男性:女性は、相談において68.3%:60.5%、病気において58.3%:45.8%、介護において70.4%:50.9%であり、配偶者によるサポートは、男性の方が女性よりもやや期待をしている。他方で、親・兄弟姉妹からサポートを期待できると回答した割合については、全く逆のパターンが読みとれる。男性:女性は、相談において27.7%:37.2%、病気において45.0%:50.4%、介護において27.3%:44.3%ある。同様に、子供とその夫婦からサポートを期待できると回答した割合についても逆のパターンが読みとれる。男性:女性は、相談において12.2%:24.7%、経済において13.0%:19.6%、病気において27.1%:39.8%、介護において、27.3%:44.3%である。以上より、女性と比較して、男性のソーシャル・サポートにおいては配偶者が重要であり、女性においては、子供とその夫婦や親・兄弟姉妹が重要である。

(2) 例えば、ソーシャル・サポート項目の一部に、配偶者、子供とその夫婦がある。言うまでもなく、若い世代の未婚者層では配偶者は存在しない。また加齢に伴い、高齢世代においては男性と女性の寿命の違いから、女性において配偶者が存在しなくなる。また子供とその夫婦についても、既婚者層であっても十分に歳を経ないと頼りにならない。先行研究での指摘どおり、年齢やライフステージと男女間のこのような関連のために、ソーシャル・サポート項目間の関連は複雑なものとなっている。具体例として、配偶者に相談を頼る割合を、男女・年齢層ごとに見ると、40代では男女差が見られないが、50代では、71%:65%、60代では、75%:58%、70代では、67%:41%、と中高年齢において、女性に比べて男性が配偶者に頼る傾向が顕著に見られることが確認できる。次に、婚姻状態も視野に入れ、年齢を10年ごとに区切り、配偶者への相談の記述分析を行い、配偶者への相談について、配偶者が存在する男性と女性の比較をすると、20代では男性:女性は85%:86%、30代では86%:78%、40代では84%:78%、50代では79%:75%、60代では79%:77%、70代では75%:73%、となる。つまり、男性でも女性でも、配偶者が存在する限りは相手を頼りにする割合は似通っている。ただし、親・兄弟姉妹や、子供とその夫婦に頼る割合については、男性よりも女性の方が高い傾向が見られる。その上、中高齢の女性で配偶者の死別・離別を経験する層において、親・兄弟姉妹や、子供とその夫婦に頼る割合が一応高くなっており、これがサポートの男女差のコントラストを強めている具体的には、年齢が高くなるに従い、女性において急激に、配偶者の死別・離別の割合が増加する。女性において、配偶者が存在する女性の割合は、NFRデータにおいては、60~64歳で79.33%、65~69歳で71.17%、70~74歳で59.94%、75歳以上で47.55%、と減少する。他方で、男性において、配偶者が存在する男性の割合は、60~64歳で94.60%、65~69歳で94.00%、70~74歳で91.08%、75歳以上で85.44%、とあまり減少しない。このため、配偶者の存在する割合が、男性と女性とでは大

大きく異なってくる。このことが、ソーシャル・サポートにおいて、配偶者以外を女性に選択せしめる構造的要因の一つとなっている。このように、ソーシャル・サポートの測定には色々な問題を念頭におく必要がある。また、病気・事故の際のサポートや、介護が必要になった場合のサポートについては、相談サポートに比べると、配偶者が存在していても、男性に比べて女性は配偶者以外のソーシャル・サポートを広げている。

(3) 配偶者収入があるが世帯収入は無いという回答に対しては配偶者収入を世帯収入とみなした(男性・女性ともにわずかなケース)。また、世帯収入は無いがサポートが非常に多い女性が2ケースのみあり、分析から除外した。以降の分析は以上の作業を施したデータに対する結果である。ただし、以上の作業を施さずとも以後の全ての分析結果にほとんど違いはないが、女性において、世帯収入とサポートのグラフ(図4)の左端の値がやや高くなる。

(4) グラフでは、分かりやすくするために、関連の弱いいくつかの項目を除き、社会階層と正の関連を示す項目のみを示してある。さらに、子供夫婦からの相談、経済、病気、介護の四つのサポート項目については、学歴、世帯収入、職業いずれにおいても男女とも一貫して負の関連を示していることには注意する必要がある。

(5) 例えば、社会的交際についての3相データの先駆的な質問項目としては、1975年SSM調査データが挙げられる(1975年SSM全国調査委員会)。そこでは、20の職種について、a. 友人・知人として実際に交際のある職種、b. 親戚に含まれる職種、c. 交際をしてみたい職種、の三つの条件に対し、その有無について測定している。

(6) サポートのデータを、複数の特性を複数の方法によって測定するMTMM(多特性・多方法/Multi-Trait Multi-Method)データ構造として把握することは、非常に興味深い(Campbell and Fiske 1959, Bagozzi 1994)。この分析は、指標の妥当性と信頼性(直井1983)を明らかにすることであり、心理学などでしばしば用いられてきた。MTMMデータの構造方程式モデリングによる分析は、モデルに特定の因子負荷行列を設定することで行われる。例えば、それぞれの観測変数は、サポートの内容を示す因子の一つとサポートの供給源を示す因子の一つの線形結合によって決まるとする加法モデルが一例である。例えば、相談を配偶者から受けられるという質問に対する回答は、相談というサポート内容因子と、配偶者というサポート供給源因子の両方の加算和によって決まるとする。

(7) 複数の測定項目を分析する際には、個別に分析をするのではなく、信頼性を高めるためしばしばそれら複数の項目を加算して尺度化がなされる。尺度化の際には、信頼性の下限を与える α 係数の大きさが根拠とされる。ただし、尺度化の際に誤差が入るため分析に用いる他の変数との相関関係が弱くなる傾向がある。他方、複数の測定項目を構造方程式モデリング(SEM)によって分析すると誤差の混入を考慮して分析が出来るため、相関関係の希薄化を防ぐことが出来る。ただし、測定項目が多くなるとモデルの適合度をあげることが困難となり、モデルに含めることが出来ない変数も出てくる。今回の場合、このような複雑なモデルを一度に分析することは実質的にかなり困難である。また、ソーシャル・サポート項目が二値変数であることにも注意を要する。二値変数は、通常の構造方程式モデリングの手法では適切な分析が出来ない。測定された二値変数が、本来は連続変数であり、観測される際に二値変数として測定されたという仮定が妥当である場合には、分析を行うことが出来るが、2000~5000以上の大きなサンプル数が望ましいと言われていて(Yuan and Bentler 1994)。さらに、現時点では統計解析パッケージの制限もある。理想は、全ての変数の関連を同時に分析することだが、二値変数の構造方程式モデリングでは一度に扱える変数の数が限られている場合もあり、部分部分の分析しか行えないこともある。

(8) α 係数は連続変数に対するものであるが、求めると、0.3~0.4程度とかなり低い。ただし、配偶者の有無、職業や年齢層等でサンプルを区切ると、 α 係数が0.6程度まで上がる。とはいえ、サポートの観測変数は二値変数なので、そもそも α 係数を加算の厳密な根拠には出来ない。また、サポートの項目においては、配偶者からの有無は、1人から有るか無いかだが、友人、近隣などの項目では何人から有るのかどうか様々であり、量的な側面は不明である。さらに、サポートがあるにしても、どの程度のサポートであるのか、質的な側面についても不明である。

(9) なお、28変数全てから α 係数を求めると、0.694である。また、サポートの供給源ごとに加算をして尺度化を行うと、七つのサポート供給源の変数の個別の α 係数は比較的高い(0.7~0.8程度)。しかし、これらの七つの観測変数に対してSEMを施して一つの潜在変数にまとめると、適合度がよくない。このためもあり、観測変数のレベルでサポートの内容ごとに加算をして、四つのサポート内容の観測変数を元に、SEMを適用する。

(10) これら4変数に対する α 係数は、男性では0.84、女性では0.85、である。

(11) 質問項目のもともとのカテゴリーでは、専門・技術系の職業、管理的職業、事務・営業系の職業、販売・サービス系の職業、技能、労務、作業系の職業、農林漁業職、その他、無回答、となっており、8カテゴリーである。この分析にあたり、ごく少数である「その他」を除いた上で、専門管理(専門・技術系の職業、管理的職業)、事務販売(事務・営業系の職業、販売・サービス系の職業)、労務・農業(技能、労務、作業系の職業、農林漁業職)、無職、の4カテゴリーに統合した。

(12) 学歴については就学年数に変換した。

(13) 世帯収入は、もとの回答カテゴリー(1. 収入なし、2. 100万円未満、3. 100~129万円、4. 130~199万円、5. 200~399万円、6. 400~599万円、7. 600~799万円、8. 800~999万円、9. 1000~1199万円、10. 1200万円以上)を、対応する金額(単位: 万円)に変換した。

(14) ごく少数である「その他」は分析から除いた。

(15) 専門・技術系の職業、管理的職業、事務・営業系の職業、販売・サービス系の職業、技能、労務、作業系の職業、農林漁業職、無職のそれぞれに対して、分析を別々にしてSEMを7回実行し、七つの分析結果を示すこともできる。ただし、この場合潜在変数の平均の比較は出来ないため、社会経済的地位とソーシャル・サポートの切片と平均の職業間比較は出来ない。以上より、専門管理、事務販売、労務農業、無職の四つの職業比較を一つのモデルで示すことにした。

(16) 男性では、因子負荷量は、学歴0.18、世帯収入0.16、相談0.71、経済0.64、病気0.88、介護0.81、適合度は、 $\chi^2=216.02$, d.f. = 9, CFI = 0.963, AGFI = 0.948, GFI = 0.978, RMSEA = 0.086。女性では、因子負荷量は、学歴0.13、世帯収入0.21、相談0.74、経済0.65、病気0.87、介護0.80、適合度は、 $\chi^2=175.46$, d.f. = 9, CFI = 0.973, AGFI = 0.961, GFI = 0.983, RMSEA = 0.073。本研究のものと同様の、職業による多母集団解析の簡便法を適用すると適合度は男女共にさらに落ちる。

引用文献

- 1975年SSM全国調査委員会, 1976, 『1975年SSM調査基礎集計表』.
- Bagozzi, Richard P. (Eds.), 1994, *Advanced methods of marketing research*. Cambridge, Mass. : Blackwell Business
- Bagozzi, Richard P. (Eds.), 1994, *Principles of marketing research*. Cambridge, Mass. : Blackwell Business, 1994.
- Campbell, D. T., and Fiske, D. W. 1959. Convergent and discriminant validation by the multitrait-multimethod matrix. *Psychological Bulletin*, 56, 81-105.
- Campbell, K. E. and Marsden, P. V. and J. S. Hurlbert, 1986, *Social Resources and Socioeconomic Status, Social Networks*, 8, 97-117.
- 林 拓也, 2000, 「階層的地位と友人ネットワーク」, 森岡清志編著『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会: pp. 41-56.
- 平松 闕, 1987, 「地域における社会的勢力」, 九州 SSM 調査班『階層構造の地域比較 - 九州 SSM 調査からの報告 -』: pp. 138-153.
- 今田高俊・原 純輔, 1979, 「社会的地位の一貫性と非一貫性」, 富永健一編著『日本の階層構造』東京大学出版会: pp. 161-197.
- 稲葉昭英 1992, 「ソーシャル・サポート研究の展開と問題」『家族研究年報』17: 67-78.
- 稲葉昭英 2000, 「サンプリングとデータの基本特性」, 日本家族社会学会全国家族調査 (NFR) 研究会『家族生活についての全国調査 (NFR98) No. 1』: pp. 10-17.
- 稲葉昭英・浦 光博・南 隆男, 1987, 「『ソーシャル・サポート』研究の現状と課題」, 三田哲学会編『哲学』85: 109-149.
- 石原邦雄, 2000, 「親族内外の援助関係」, 日本家族社会学会全国家族調査 (NFR) 研究会『家族生活についての全国調査 (NFR98) No. 1』: pp. 93-100.
- 狩野 裕, 2000, 「共分散構造分析 (SEM) は, パス解析, 因子分析, 分散分析のすべてにとって代わるのか?」, 日本行動計量学会『第3回 春の合宿セミナー資料集』pp. 85-102.
- 狩野 裕, 2000, 「行動データ科学特講 B-I・行動データ科学演習 I 講義資料」大阪大学人間科学部.
- Kano, Y., 2000, "Structural equation modeling for experimental data," *Structural Equation Modeling, Present and Future*, pp. 381-402.
- 前田信彦・目黒依子, 1990, 「都市家族のソーシャル・ネットワーク・パターン」, 日本家族社会学会編『家族社会学研究』2: 81-93.
- 村澤昌崇, 1998, 「階層文化と交際」, 片岡栄美編著『1995年 SSM 調査シリーズ 18 文化と社会階層』1995年 SSM 調査研究会: pp. 159-169.
- 村瀬洋一, 1998, 「関係的資源保有の格差と規定因 - 有力者との人間関係を指標とした政治的影響力の階層構造 -」, 片瀬一男編著『1995年 SSM 調査シリーズ 7 階層意識の現在』1995年 SSM 調査研究会: pp. 131-150.
- 村瀬洋一, 1999, 「有力者とのネットワーク保有の規定因 - 関係的資源を指標とした政治的影響力の社会階層構造 -」, 日本社会学会編『社会学評論』50: 21-50.
- 直井 優, 1979, 「職業威信尺度の構成」, 富永健一編著『日本の階層構造』東京大学出版会: pp. 434-472.
- 直井 優, 1983, 「社会調査の設計」, 直井 優編『社会調査の基礎』サイエンス社: pp. 3-43.
- 野辺政雄, 1999, 「高齢者の社会的ネットワークとソーシャルサポートの性別による違いについて」, 日本社会学会編『社会学評論』50: 375-392.
- 岡本隆宏, 1989, 「日常交際における社会的同質性と階層構造」『年報人間科学』10: 89-110.
- 菅野 剛, 2000, 「社会的ネットワークの経時分析」『年報人間科学』21: 123-143.
- 浦 光博, 1992, 『セレクション社会心理学 支えあう人と人: ソーシャル・サポートの社会心理学』, サイエンス社.
- 大和礼子, 1996, 「中高年男性におけるサポート・ネットワークと『結びつき志向』役割との関係」, 日本社会学会編『社会学評論』47: 350-365.
- 大和礼子, 2000, 「“社会階層と社会的ネットワーク”再考」, 日本社会学会編『社会学評論』51: 235-250.

(2001年3月26日提出)

文部省科学研究費基盤研究（A）：10301010

家族生活についての全国調査（NFR98）報告書 No.2-6

現代家族におけるサポート関係と高齢者介護

Support Resources and Care for the Aged of the Contemporary Family

石原邦雄・大久保孝治 編

2001年9月

日本家族社会学会
全国家族調査（NFR）研究会